

大学生の汎用的技能に関する研究(2)

— 大学生活の過ごし方と汎用的技能の関連性 —

向 居 暁・植 村 広 美

1. 問題意識と目的

本研究では学士課程共通の学習成果の指針である「学士力」をはじめ、行政主導で提唱されてきた汎用的技能という包括的な能力概念に着目し、大学生活と汎用的技能との関連性、および、大学生活の観点から分類した学生タイプと汎用的技能の関連性について分析を行う。

日本の高等教育は大学進学率が50%を超えるユニバーサル化の時代に入るとともに、グローバル社会や知識基盤社会の到来、教育の市場化等を背景として、その社会的役割に変化が生じている。経済産業省の提唱する社会人基礎力や文部科学省による学士力に向けた取組みに見られるように、高等教育には知の探求に加えて、汎用的能力の育成という新たな役割が求められるようになった。いかなる学校種や専門分野に関わらず、すべての高等教育機関で社会的・職業的自立に向けた能力や態度を育む教育の必要性が指摘されているのである。それでは、汎用的技能とは具体的にどのような能力を指すのであろうか。これまで、汎用的技能は中央教育審議会が提唱した「生きる力（1996年）」を皮切りに、内閣府による「人間力（2003年）」、厚労省による「就職基礎能力（2004年）」、経産省による「社会人基礎力（2006年）」、文科省による「学士力（2008年）」等、政府主導で提唱されてきたが、これらの能力の分類（例えば、社会人基礎力における下位能力など）については、実証的根拠が不十分であるという指摘がある（子安, 2011；向居, 2013；向居・佐藤, 2012）。

そこで、植村・向居（2020）は、山田・森（2010）などの先行研究に基づいて汎用的技能を測定する尺度の作成を試みた。汎用的技能に関する項目については、山田・森（2010）で用いられた項目を中心として、溝上（2009）や日瀨・森口・小山田・齋藤・城（2009）などの項目も参考にしながら76項目が選定された。その結果、第1因子「社会的関係形成・参画力」、第2因子「創造的問題解決力」、第3因子「自己主張・リーダーシップ力」、第4因子「批判的思考力」、第5因子「専門知識・知的面での自信」、第6因子「母語運用力」、第7因子「外国語運用力」、第8因子「情報リテラシー」の8因子、計41項目からなる汎用的技能尺度を作成した。この汎用的技能尺度を用いて、大学生活の過ごし方（学業やクラブ・サークル活動、アルバイトなど）が、どのように汎用的技能に影響しているのかを探求することは、大学教育の質の保証の観点から考えても非常に重要であろう。加えて、見館・永井・北澤・上野（2008）も指摘しているように、授業や研究活動を通して学生に知識・技能を身につけてもらうという大学教育の本分を見失わないためにも、特に正課内における学業への意欲が大学生活における充実感につながることを明示することもまた意義深いと考えられる。

本稿では第一に植村・向居（2020）の汎用的技能尺度を用いて、「授業・ゼミへの参加意欲」、「授業またはゼミに関する勉強をする意欲」、「クラブ・サークルへの参加意欲」、「アルバイトをする意欲」、「友達や恋人と遊ぶ意欲」などといった、正課内・外を問わない大学生活における諸活動への参加意欲と汎用的技能との関連性について分析する。それをふまえて、第二に授業・ゼミ、クラブ・

サークル、アルバイト、交友関係など、各学生が重要視する諸活動への意欲が大学生活全般のなかでどのように位置づくかが明示されるような学生タイプを作成し、そのタイプの差異が汎用的技能とどのように関連するのかについて検討を行う。具体的な分析手続きとしては、第一に大学生活における諸活動への意欲と植村・向居（2020）が作成した汎用的技能尺度の各因子との相関分析、第二に大学生活における諸活動への意欲を説明変数、汎用的技能尺度の各因子を目的変数とした重回帰分析、そして、第三に汎用的技能尺度の各因子を用いて調査協力者の大学生をクラスター分析によっていくつかの学生タイプに分類した後、それらと汎用的技能との関連性をみるための分散分析を行う。加えて、大学生生活の充実感と大学生活における諸活動への意欲、および、学生タイプの関連性を検討する。

2. 調査の概要

2-1. 調査対象者・実施方法

広島県内の国立A大学、公立B大学、私立C大学の3大学に所属する670名に配布し、回収された632名（男性203名、女性408名、不明21名）が対象である（植村・向居（2020）で分析対象となった調査対象者と同じ）。なお、調査対象者の学年は1年生91名、2年生343名、3年生123名、4年生74名、所属する学部系統は人文社会系369名、教育系205名、工学系40名、家政系40名であった。

2-2. 調査時期

2017年12月中旬～2018年9月末日

2-3. 調査内容

調査全体の構成は、溝上（2009）の大学生生活の過ごし方を参考にして①大学生生活の充実感に関わる項目（1項目）、②大学生生活の重点（1項目）、③大学生生活の過ごし方（8項目）、④大学生生活で意欲的に従事する活動（8項目）の項目を作成し、山田・森（2010）を参考にして⑤汎用的技能に関する項目（76項目）を作成した。

①大学生生活の充実感 「あなたの学生生活は充実していますか」に対して、“(1)充実している”～“(5)充実していない”の5件法で評定を求めた。つまり、大学生生活が充実していると感じられているほど得点が低くなる。

②大学生生活の重点 「あなたの大学生生活は、以下の8つのうち、どれに近いですか」という問いのもと、8つの選択肢（実際には「その他」を入れて9つ）を与えた。選択肢は、「勉強第一」、「クラブ・サークル第一」、「趣味第一」、「豊かな人間関係」、「資格取得第一」、「アルバイト・貯金」、「何事もほどほどに」、「何となく」、「その他」であった。

③大学生生活の過ごし方 「現在のあなたの大学生生活において、以下の項目は一週間に何時間を占めていますか」という問いのもと、「授業またはゼミに参加する時間」、「授業またはゼミに関する勉強をする時間」、「授業やゼミに関係のない勉強を自主的にする時間」、「クラブ・サークル活動をする時間」、「家族と交流する時間」、「友達や恋人と遊ぶ時間」、「アルバイトをする時間」、「インターネットやSNSに費やす時間」のそれぞれの項目に対して、“(1)まったくない”、“(2)1時間未満”、“(3)1～3時間未満”、“(4)3～6時間未満”、“(5)6～10時間未満”、“(6)10～15時間未満”、“(7)16～21時

間未満”、“(8)21～30時間未満”、“(9)30時間以上”の9件法で評定を求めた。

④大学生活で意欲的に従事する活動 「入学してから現在までの大学生活において、以下の項目をどれほど意欲的に取り組みましたか」という問いのもと、「授業またはゼミに参加する意欲」、「授業またはゼミに関する勉強をする意欲」、「授業やゼミに関係のない勉強を自主的にする意欲」、「クラブ・サークル活動をする意欲」、「家族と交流する意欲」、「友達や恋人と遊ぶ意欲」、「アルバイトをする意欲」、「インターネットやSNSを活用する意欲」のそれぞれの項目に対して、“(1)まったくなかった”～“(4)非常にあった”の4件法で評定を求めた。

⑤汎用的技能 植村・向居 (2020)は汎用的技能尺度を用いた。この尺度は、先述したように、第1因子「社会的関係形成・参画力」、第2因子「創造的問題解決力」、第3因子「自己主張・リーダーシップ力」、第4因子「批判的思考力」、第5因子「専門知識・知的面での自信」、第6因子「母語運用力」、第7因子「外国語運用力」、第8因子「情報リテラシー」の8因子、計41項目で構成されている。調査対象者には、それぞれの項目に対して“(1)まったく身につけていない”～“(5)非常に身につけている”の5件法で評定を求めた。

3. 結果と考察

本稿では、植村・向居 (2020)の汎用的技能尺度を用いて、大学生活の過ごし方と汎用的技能との関連性、そして、大学生活から分類した学生タイプと汎用的技能の関連性について分析を行う。加えて、大学生活における充実感と大学生活や学生タイプの関連性に関する分析も行う。

3-1. 汎用的技能と大学生活の関連性

大学生活の充実度、および、大学生活における諸活動の時間数に関する評定、大学生活における諸活動の意欲の平均値は表1に示すとおりである。

まず、汎用的技能と大学生活の充実度、および、大学生活の諸活動への意欲との関連性を検討するために、汎用的技能の各因子と大学生活の諸活動への意欲に関する各項目について相関分析を行った(表2)。以下の相関係数の分析については、 $0.0 \leq |r| \leq 0.2$ を「ほとんど相関なし」、 $0.2 < |r| \leq 0.4$ を「弱い相関あり」、 $0.4 < |r| \leq 0.7$ を「比較的強い相関あり」、 $0.7 < |r| \leq 1.0$ を「強い相関あり」と記述する(吉田, 1998参照)。

その結果、「社会関係形成・参画力」(F1)は大学生活充実感と弱い負の相関が、そして授業・ゼミへの参加時間数では関連が低いものの、授業・ゼミへの参加意欲、授業・ゼミへの勉強意欲、友達・恋人と遊ぶ意欲と弱い正の相関がみられた。「創造的問題解決力」(F2)は、大学生活充実感と弱い負の相関が、そして授業・ゼミの勉強意欲、および、授業・ゼミ以外の勉強意欲と弱い正の相関がみられた。「自己主張・リーダーシップ力」(F3)は、大学生活充実感と弱い負の相関が、そして、授業・ゼミへの勉強意欲、授業・ゼミ以外の勉強意欲、友達・恋人と遊ぶ意欲とは弱い正の相関がみられた。「批判的思考力」(F4)は、授業・ゼミへの勉強意欲と弱い正の相関がみられたのみであった。「専門知識・知的面での自信」(F5)は、大学生活充実感と弱い負の相関が、そして、授業・ゼミへの勉強意欲、および、授業・ゼミ以外の勉強意欲と弱い正の相関がみられた。「母語運用力」(F6)は、授業・ゼミへの勉強意欲と弱い正の相関がみられたのみであった。「外国語運用力」(F7)は、授業・ゼミ以外の勉強時間数、および、授業・ゼミ以外の勉強意欲と弱い正の

相関が認められた。最後に、「情報リテラシー」(F8)は、授業・ゼミへの勉強意欲、および、授業・ゼミ以外の勉強意欲と弱い正の相関がみられた。

相関分析の結果をまとめると、大学生生活における諸活動への意欲の中でも、授業・ゼミの勉強意欲が汎用的技能ともっとも関連し、続いて、授業・ゼミ以外の勉強意欲、そして、授業・ゼミへの参加意欲や友達などと遊ぶ意欲が続いて関連していることが明らかになった。正課内・外にかかわらず、意欲的に学業に取り組む態度が汎用的技能と関連していることが明らかになったといえる。また、大学生生活における諸活動への意欲と大学生生活充実感の間には、概して負の相関が認められた。すなわち、大学生生活における諸活動に意欲的であるほど、大学生生活が充実して感じられるということである。このように汎用的技能は、大学生生活における諸活動への意欲との関連が深いことがわかった。以下の分析においては、汎用的技能と関連が認められた大学生生活における諸活動への意欲を中心に分析する。また、後に、大学生生活の充実感についても大学生生活における諸活動への意欲などとの関連を分析する。

表1 大学生生活の充実感および大学生生活における諸活動への時間・意欲の平均値 (SD)

変数名	平均値	(SD)
大学生生活充実感	2.11	(0.80)
授業・ゼミ時間数評定	6.24	(1.74)
授業・ゼミの勉強時間数評定	3.65	(1.43)
授業・ゼミ以外の勉強時間数評定	2.44	(1.52)
クラブ・サークル時間数評定	2.79	(1.87)
家族交流の時間数評定	3.35	(2.16)
友達・恋人と遊ぶ時間数評定	4.16	(1.76)
アルバイトの時間数評定	5.41	(2.11)
インターネット・SNSの時間数評定	5.33	(1.89)
授業・ゼミへの参加意欲	3.06	(0.68)
授業・ゼミの勉強意欲	2.78	(0.70)
授業・ゼミ以外の勉強意欲	2.41	(0.85)
クラブ・サークルへの意欲	2.67	(1.01)
家族交流の意欲	2.76	(0.87)
友達・恋人と遊ぶ意欲	3.27	(0.76)
アルバイトへの意欲	3.03	(0.81)
インターネット・SNSへの意欲	3.12	(0.73)

表2 汎用的技能尺度と大学生生活（学年・性別・充実感・時間・意欲）に関する各指標の相関分析結果

	学年	性別	大学生生活充実感	授業・ゼミ時間数評定	授業・ゼミの勉強時間数評定	授業・ゼミ以外の勉強時間数評定	クラブ・サークル時間数評定	家族交流の時間数評定	友達・恋人と遊ぶ時間数評定	アルバイトの時間数評定	インターネット、SNSの時間数評定	授業・ゼミへの参加意欲	授業・ゼミの勉強意欲	授業・ゼミ以外の勉強意欲	クラブ・サークルへの意欲	家族交流の意欲	友達・恋人と遊ぶ意欲	アルバイトへの意欲	インターネット、SNSへの意欲
F1 社会関係形成・参画力	.07	.07	-.22**	-.03	.13**	.11**	.04	.01	.13**	.05	-.10*	.26**	.26**	.20**	.10*	.13**	.27**	.05	.03
F2 創造的問題解決力	.04	-.04	-.20**	-.01	.07	.17**	.06	-.01	.08*	.05	-.09*	.12**	.22**	.28**	.04	.03	.11**	.05	-.02
F3 自己主張・リーダーシップ力	.11**	-.02	-.31**	-.04	.07	.15**	.12**	-.06	.14**	.11**	-.08	.20**	.23**	.28**	.12**	-.03	.20**	.08*	-.05
F4 批判的思考力	.04	-.11**	-.16**	.05	.15**	.15**	.04	-.04	.01	-.02	-.07	.18**	.21**	.18**	.02	-.06	.03	-.06	-.04
F5 専門知識・知的面での自信	.03	-.11**	-.21**	.00	.10*	.16**	.01	-.02	.03	-.01	-.04	.15**	.28**	.25**	.01	.03	.06	-.03	.00
F6 母語運用力	.05	.01	-.17**	.05	.08	.09*	.02	-.01	.07	.02	-.03	.14**	.20**	.19**	.04	.04	.17**	-.01	-.01
F7 外国語運用力	-.08*	.02	-.02	.06	.07	.22**	-.05	-.04	.00	.01	-.10*	.12**	.17**	.28**	-.04	.07	.09*	.05	-.03
F8 情報リテラシー	.05	.04	-.13**	.02	.14**	.14**	-.04	.03	.00	-.03	.04	.17**	.25**	.12**	.01	-.02	.13**	-.01	.13**

** $p < .01$, * $p < .05$

3-2. 大学生生活の諸活動への意欲が汎用的技能に与える影響

大学生生活が汎用的技能にどのような影響を与えているのかについて明らかにするために、大学生生活の諸活動への意欲を説明変数にし、汎用的技能尺度の各因子を目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った（表3）。

その結果、「社会関係形成・参画力」(F1)については、友達・恋人と遊ぶ意欲、授業・ゼミへの参加意欲、授業・ゼミの勉強意欲が正の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .16$, $F(8, 572) = 13.41$, $p < .01$)。「創造的問題解決力」(F2)については、授業・ゼミ以外の勉強意欲、授業・ゼミの勉強意欲、友達・恋人と遊ぶ意欲が正の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .11$, $F(8, 572) = 8.76$, $p < .01$)。「自己主張・リーダーシップ力」(F3)は友達・恋人と遊ぶ意欲と授業・ゼミ以外の勉強意欲が正の影響を、家族交流の意欲とインターネット・SNSへの意欲が負の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .15$, $F(8, 572) = 12.70$, $p < .01$)。「批判的思考力」(F4)については、授業・ゼミの勉強意欲、授業・ゼミ以外の勉強意欲が正の影響を、家族交流の意欲、アルバイトへの意欲が負の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .08$, $F(8, 572) = 6.34$, $p < .01$)。「専門知識・知的面での自信」(F5)については、授業・ゼミの勉強意欲、授業・ゼミ以外の勉強意欲が正の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .11$, $F(8, 572) = 8.71$, $p < .01$)。「母語運用力」(F6)については友達・恋人と遊ぶ意欲、授業・ゼミの勉強意欲、授業・ゼミ以外の勉強意欲が正の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .09$, $F(8, 572) = 6.61$, $p < .01$)。「外国語運用力」(F7)については、授業・ゼミ以外の勉強意欲のみが正の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .10$, $F(8, 572) = 7.68$, $p < .01$)。最後に、「情報リテラシー」(F8)については、授業・ゼミの勉強意欲、友達・恋人と遊ぶ意欲、インターネット・SNSへの意欲が正の影響を、家族交流の意欲、および、アルバイトへの意欲が負の影響を与えていることがわかった ($R^2 = .11$, $F(8, 572) = 8.45$, $p < .01$)。

全体的にみても、授業・ゼミ以外の勉強意欲が「情報リテラシー」(F8)以外のすべての汎用的技能尺度の因子を有意に説明していることがわかった。また、授業・ゼミの勉強意欲も同様に「社会関係形成・参画力」(F1)、「自己主張・リーダーシップ力」(F3)、「外国語運用力」(F7)以外のすべての汎用的技能尺度を有意に説明していることがわかった。このことから、正課内・外の学びへの意欲が学生の汎用的技能を高めるために重要な要因であることが明らかになった。さらに、学習面の意欲に限らず、友達・恋人と遊ぶ意欲についても「批判的思考力」(F4)、「専門知識・知的面での自信」(F5)、「外国語運用力」(F7)以外のすべての汎用的技能の因子に有意な影響を与えていることもわかった。他方、クラブ・サークルへの意欲は、汎用的技能に有意な影響を与えておらず、インターネット・SNSへの意欲も「情報リテラシー」(F8)以外のすべての汎用的技能尺度に影響を与えないことがわかった。このことから、クラブ・サークルへの参加意欲、および、インターネット・SNSを利用する意欲については、汎用的技能を高める要因にはあまりなっていないことがわかる。なお、家族交流の意欲が「自己主張・リーダーシップ力」(F3)、および、「批判的思考力」(F4)に対して負の影響を与えていること、また同様に、アルバイトへの意欲が「批判的思考力」(F4)、および、「情報リテラシー」(F8)に対して負の影響を与えていることについても留意する必要があるだろう。

表3 大学生生活の諸活動への意欲と汎用的技能尺度の各因子の重回帰分析結果

	F1 社会関係形成 ・ 参画力	F2 創造的問題 解決力	F3 自己主張・ リーダーシップ力	F4 批判的思考力	F5 専門知識・ 知的面での自信	F6 母語運用力	F7 外国語運用力	F8 情報リテラシー
授業・ゼミへの参加意欲	.14**	-.05	.09	.09	-.05	.00	.02	.00
授業・ゼミの勉強意欲	.10	.14*	.07	.13*	.25**	.15**	.05	.24**
授業・ゼミ以外の勉強意欲	.12**	.23**	.21**	.10*	.16**	.12*	.25**	.05
クラブ・サークルへの参加意欲	.04	.00	.06	-.02	-.02	-.02	-.06	-.04
家族交流の意欲	.03	-.03	-.12**	-.12**	-.03	-.04	.02	-.11*
友達・恋人と遊ぶ意欲	.25**	.12**	.21**	.07	.08	.19**	.09	.15**
アルバイトへの意欲	-.03	.03	.05	-.10*	-.06	-.07	.02	-.10*
インターネット・SNSへの意欲	-.03	-.03	-.09*	-.03	.02	-.04	-.04	.11**
R^2	.16**	.11**	.15**	.08**	.11**	.08**	.10**	.11**

** $p < .01$, * $p < .05$ (値は標準偏回帰係数(β))

3-3. 大学生生活の過ごし方からみた学生タイプの分類

大学生生活の諸活動への意欲と汎用的技能の関連性をさらに分析するために、大学生生活の諸活動への意欲によって学生をいくつかのタイプに分類し、それぞれの学生タイプがどのような汎用的技能の特徴を示すのかについて検討を行った。

まず、調査対象となった大学生を大学生生活の諸活動への意欲で分類するために、大学生生活の諸活動への意欲の8項目の評定値を用いてクラスター分析(Ward法)を行った。クラスターごとの諸活動への意欲の平均値および標準偏差は表4に示すとおりである。また、各クラスターにおけるそれぞれの大学生生活の諸活動への意欲の標準化された得点は表5下部に示されている。

これらの表に示されたとおり、まず1クラスターから第4クラスターはクラブやサークル活動の意欲が高い学生、第5クラスターから第8クラスターまではクラブやサークル活動への意欲が低い学生という形で分類された。基本的に、大学におけるクラブやサークルは自らの意思で参加や継続が可能のために、意欲の差によってはっきりと分かれたのであろう。そこで、まずはクラブやサークル活動への意欲が高い学生群のうち第1クラスター(117人)をみると、友達・恋人と遊ぶ意欲、アルバイトへの意欲、インターネット・SNSへの意欲が比較的高いこと、そして、授業やゼミに関する意欲はやや低めながら、授業・ゼミ以外の勉強意欲がかなり低いことに特徴づけられる学生タイプであることがわかった。各クラスターの特徴を判断するために「大学生生活の重点」項目のデータを参照したところ、他のクラスターと比較して「クラブ・サークル第一」を選択した学生が多く、「勉強第一」を選択した学生が少ないことから、クラブ・サークル活動を重視し、学業をあまり重視しない学生タイプであると考えられる。第2クラスター(66人)は、授業・ゼミへの参加意欲、授業・ゼミへの勉強意欲、授業・ゼミ以外への勉強意欲など学習活動への意欲が全体的に低く、そして、アルバイトへの意欲が非常に低く、インターネット・SNSへの意欲がかなり低いことに特徴付けられる学生タイプであることがわかった。「大学生生活の重点」項目では、「クラブ・サークル第一」を選

択した学生が多く、「アルバイト・貯金」を選択した学生が全くいなかったことから、クラブ・サークル活動を重視し、アルバイトを全く重視しない学生タイプであると考えられる。他方、第3クラスター（104人）は、授業・ゼミ以外の勉強意欲がかなり高く、授業・ゼミへの参加意欲と授業・ゼミの勉強意欲も高いが、家族交流の意欲が低めな学生タイプであることがわかった。クラブ・サークル活動に加えて、学業を中心とした正課内・外活動を重視する学生タイプであると考えられる。第4クラスター（75人）は、すべての意欲が高く、特に家族交流の意欲や友達・恋人と遊ぶ意欲が非常に高いことに特徴づけられる学生タイプであることがわかった。「大学生生活の重点」項目では「豊かな人間関係」を選択した学生が多かったことから、クラブ・サークル活動や学業に加え、良好な人間関係を重視する学生タイプであると考えられる。続いて、クラブやサークル活動への意欲が低い学生群のうち第5クラスター（76人）をみると、アルバイトへの意欲は少しあるものの、授業・ゼミへの参加意欲、授業・ゼミの勉強の意欲が非常に低く、授業・ゼミ以外の勉強意欲、クラブ・サークルへの意欲が低いことに特徴付けられる学生タイプであることがわかった。「大学生生活の重点」では「趣味第一」や「アルバイト」を選択した学生が多く、学業やクラブ・サークル活動を重視せずに、趣味やアルバイトを重視する学生タイプであると考えられる。第6クラスター（45人）は、授業・ゼミ以外の勉強意欲が高く、また、授業・ゼミへの参加意欲や授業・ゼミの勉強意欲も比較的高いが、それ以外の活動の意欲がかなり低い学生タイプであることがわかった。「大学生生活の重点」では「勉強第一」の学生が多く、「豊かな人間関係」を選択した学生が少なかったことから、学業を特に重視し、人間関係をあまり重視しない学生タイプであると考えられる。第7クラスター（49人）は、クラブ・サークルへの意欲は低いものの、授業・ゼミへの参加意欲や授業・ゼミの勉強意欲が高く、そして、家族交流の意欲が非常に高いことや友達・恋人と遊ぶ意欲が高いことに特徴付けられる学生タイプであることがわかった。「大学生生活の重点」では「勉強第一」の学生が多く、学業を重視しながら家庭を中心とした人間関係を重視する学生タイプであると推察される。第8クラスター（95人）は、クラブ・サークルへの意欲が低いが、授業・ゼミへの参加意欲、授業・ゼミへの勉強意欲、授業・ゼミ以外への勉強意欲など学習活動への意欲が比較的高めな学生タイプで、ちょうど第2クラスターとは対照的な特徴を示すことがわかった。

3-4. 学生タイプと汎用的技能の関連性

学生タイプによって汎用的技能の得点に差異が認められるかどうかを検討するために、それぞれの汎用的技能の因子の平均値について8つの学生タイプを独立変数とする1要因分散分析を行った（表5上部）。その結果、「社会関係形成・参画力」（F1）について、学生タイプに主効果が認められた（ $F(7, 596) = 7.22, \eta_p^2 = .08, p < .01$ ）。そのため、多重比較（Holm法）を行ったところ、C4とC1、C2、C5、C6、C8の間、C3とC5、C6の間、C7とC5、C6の間に有意差が認められた。「社会関係形成・参画力」は、「創造的問題解決力」（F2）についても、学生タイプに主効果が認められた（ $F(7, 601) = 4.65, \eta_p^2 = .05, p < .01$ ）。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC1、C4とC1、C2、C5の間に有意差が認められた。「自己主張・リーダーシップ力」（F3）についても、学生タイプに主効果が認められた（ $F(7, 606) = 5.08, \eta_p^2 = .06, p < .01$ ）。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC1、C2、C5の間に有意差が認められた。「批判的思考力」（F4）についても、学生タイプに主効果が認められた（ $F(7, 597) = 3.26, \eta_p^2 = .04, p < .01$ ）。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC1、C5の間に有意差が認められた。

表4 学生タイプの各クラスターにおける大学生生活の諸活動への意欲の平均値 (SD)

クラスター	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	全体
<i>n</i>	117	66	104	75	76	45	49	95	627
授業・ゼミへの参加意欲	3.00 (0.45)	2.86 (0.58)	3.24 (0.47)	3.47 (0.53)	2.05 (0.59)	3.22 (0.67)	3.49 (0.51)	3.23 (0.57)	3.06 (0.68)
授業・ゼミの勉強意欲	2.60 (0.53)	2.56 (0.61)	3.19 (0.44)	3.11 (0.61)	1.75 (0.47)	3.02 (0.62)	3.12 (0.53)	2.96 (0.56)	2.78 (0.70)
授業・ゼミ以外の勉強意欲	1.77 (0.59)	2.18 (0.76)	3.04 (0.57)	2.77 (0.81)	1.74 (0.66)	2.91 (0.76)	2.45 (0.79)	2.69 (0.72)	2.41 (0.85)
クラブ・サークルへの意欲	3.22 (0.67)	3.27 (0.65)	3.36 (0.56)	3.49 (0.55)	1.95 (0.83)	1.78 (0.74)	1.57 (0.54)	1.72 (0.65)	2.67 (1.01)
家族交流の意欲	2.47 (0.74)	2.82 (0.72)	2.40 (0.85)	3.61 (0.52)	2.64 (0.84)	2.04 (0.74)	3.80 (0.41)	2.63 (0.68)	2.76 (0.87)
友達・恋人と遊ぶ意欲	3.40 (0.57)	3.18 (0.52)	3.24 (0.58)	3.99 (0.12)	3.17 (0.82)	1.98 (0.72)	3.84 (0.37)	3.03 (0.75)	3.27 (0.76)
アルバイトへの意欲	3.31 (0.52)	1.83 (0.60)	2.93 (0.47)	3.52 (0.62)	3.20 (0.73)	2.47 (0.84)	2.92 (1.02)	3.43 (0.60)	3.03 (0.81)
インターネット・SNSへの意欲	3.20 (0.61)	2.62 (0.72)	3.08 (0.72)	3.45 (0.66)	3.08 (0.73)	2.67 (0.77)	3.39 (0.67)	3.25 (0.73)	3.12 (0.73)

「専門知識・知的面での自信」(F5)についても、学生タイプに主効果が認められた ($F(7, 606) = 4.01, \eta_p^2 = .05, p < .01$)。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC1、C5の間、C4とC1の間、C7とC1の間に有意差が認められた。「母語運用力」(F6)についても、学生タイプに主効果が認められた ($F(7, 602) = 3.49, \eta_p^2 = .04, p < .01$)。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC5、C6の間に有意差が認められた。「外国語運用力」(F7)についても、学生タイプに主効果が認められた ($F(7, 602) = 3.69, \eta_p^2 = .04, p < .01$)。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC1の間、C4とC1の間に有意差が認められた。最後に、「情報リテラシー」(F8)についても、学生タイプに主効果が認められた ($F(7, 604) = 3.31, \eta_p^2 = .04, p < .01$)。そのため、多重比較を行ったところ、C3とC2、C5の間に有意差が認められた。

以上のことから、汎用的技能は概してクラブ・サークル活動に加えて、学業を中心とした正課内・外活動を重視する学生タイプ(C3)やクラブ・サークル活動や学業に加え、良好な人間関係を重視する学生タイプ(C4)で評定値が高くなることがわかった。また、クラブ・サークルへの意欲が低い場合においても、学業を重視しながら家庭を中心とした人間関係を重視する学生タイプ(C7)で高まることがわかった。また、概して、学業に対する意欲の低い学生タイプ、具体的には、クラブ・サークル活動を重視し、学業をあまり重視しない学生タイプ(C1)、クラブ・サークル活動を重視し、アルバイトを全く重視しない学生タイプ(C2)、学業やクラブ・サークル活動を重視せずに、趣味やアルバイトを重視する学生タイプ(C5)で評定値が低くなることがわかった。ただし、授業や勉強に対する意欲はあっても、勉強以外のすべての諸活動に対する意欲が低いC6のタイプの学生の場合も、同様に「外国語運用力」(F7)が低い傾向にあることを指摘しておきたい。「外国語運用力」(F7)という汎用的技能は、学業という営みだけでは十分に習得できないことの一つの証左であるといえよう。このような学生タイプにおける汎用的技能の差異に関する分析結果、および、大学生生活の諸活動への意欲と汎用的技能の重回帰分析結果から総合的に判断すると、主として、学業への意欲、そして、人間関係を維持する意欲が汎用的技能に大きく影響しているといえるだろう。

表5 各学生タイプにおける大学生生活の汎用的技能の平均値 (SD) および大学生生活の諸活動への意欲の標準化得点

	クラブ・サークル活動への意欲が高い				クラブ・サークル活動への意欲が低い				
	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	
汎用的技能尺度の因子*	社会関係形成・参画力(F1)	3.59 (0.47)	3.53 (0.60)	3.70 (0.53)	3.89 (0.52)	3.37 (0.68)	3.35 (0.72)	3.83 (0.56)	3.56 (0.61)
	創造的問題解決力(F2)	2.93 (0.77)	3.02 (0.75)	3.33 (0.71)	3.44 (0.73)	2.97 (0.79)	3.07 (0.77)	3.19 (0.77)	3.18 (0.75)
	自己主張・リーダーシップ(F3)	3.18 (0.73)	3.11 (0.76)	3.48 (0.68)	3.52 (0.62)	3.02 (0.69)	3.10 (0.80)	3.39 (0.65)	3.24 (0.79)
	批判的思考力(F4)	3.29 (0.65)	3.44 (0.63)	3.61 (0.59)	3.52 (0.60)	3.28 (0.58)	3.54 (0.60)	3.47 (0.62)	3.42 (0.57)
	専門的知識・知的面での自信(F5)	2.67 (0.75)	2.95 (0.85)	3.17 (0.71)	3.09 (0.85)	2.68 (0.92)	2.85 (0.85)	3.11 (0.91)	2.93 (0.81)
	母語運用力(F6)	3.60 (0.67)	3.57 (0.84)	3.86 (0.81)	3.80 (0.76)	3.45 (0.78)	3.37 (0.87)	3.80 (0.76)	3.66 (0.71)
	外国語運用力(F7)	2.82 (0.97)	2.89 (1.04)	3.27 (0.85)	3.30 (0.96)	2.87 (1.06)	2.79 (1.13)	3.31 (0.96)	3.08 (1.02)
	情報リテラシー(F8)	3.49 (0.78)	3.28 (0.94)	3.70 (0.71)	3.54 (0.61)	3.30 (0.77)	3.33 (0.90)	3.74 (0.81)	3.50 (0.80)
大学生生活の諸活動への意欲**	授業・ゼミへの意欲	-0.08	-0.28	0.27	0.61	-1.48	0.25	0.64	0.26
	授業・ゼミへの勉強意欲	-0.26	-0.31	0.60	0.47	-1.47	0.35	0.50	0.26
	授業・ゼミ以外の勉強意欲	-0.76	-0.27	0.73	0.42	-0.80	0.58	0.04	0.33
	クラブ・サークルへの意欲	0.55	0.60	0.68	0.82	-0.71	-0.88	-1.08	-0.94
	家族交流の意欲	-0.32	0.08	-0.40	0.99	-0.12	-0.81	1.20	-0.14
	友達・恋人と遊ぶ意欲	0.17	-0.12	-0.04	0.94	-0.13	-1.70	0.74	-0.31
	アルバイトへの意欲	0.34	-1.47	-0.12	0.60	0.21	-0.69	-0.14	0.49
インターネット・SNSへの意欲	0.11	-0.67	-0.06	0.46	-0.05	-0.61	0.37	0.18	

* 大学生生活における汎用的技能尺度の平均値 (SD)

** 学生タイプの各クラスターの標準化得点

3-5. 大学生生活における意欲や学生タイプと大学生生活の充実感の関連性

大学生生活の諸活動への意欲が大学生生活の充実感にどのように影響を与えているかを検討するために、大学生生活の充実感（得点が低いと充実度が高い）を説明変数にし、大学生生活の諸活動への意欲を目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、大学生生活の充実感には、友達・恋人と遊ぶ意欲、授業・ゼミの勉強意欲、クラブ・サークルへの意欲、家族交流の意欲が影響を与えていることがわかった（表6）。つまり、友達や恋人と遊ぶ意欲が高く、授業・ゼミの勉強意欲が高く、クラブ・サークルへの意欲が高く、そして、家族交流の意欲が低い学生は、大学生生活が充実していると感じていることが明らかになった。

また、学生タイプによって、大学生生活の充実感が異なるかどうかを検討するために、1要因分散分析を行った（表7）。その結果、学生タイプの大学生生活充実感の得点間に有意差が認められた（ $F(7, 618) = 3.50, \eta p^2 = .04, p < .01$ ）。そのため、多重比較（Holm法）を行ったところ、C5とC4（ $t(618) = 3.51, d = .57, \text{調整}p < .05$ ）、C6とC4（ $t(618) = 3.77, d = .71, \text{調整}p < .01$ ）、C8とC4（ $t(618) = 3.48, d = .54, \text{調整}p < .05$ ）の間に有意差が認められた。すなわち、すべての大学生生活の諸活動に対する意欲が高く、クラブ・サークル活動や学業に加え、良好な人間関係を重視するタイプの学生

(C4)は、学業やクラブ・サークル活動を重視せずに、趣味やアルバイトを重視する学生タイプ (C5)、学業を特に重視し、人間関係をあまり重視しない学生タイプ (C6)、学業への意欲はあるが、遊ぶ意欲や家族交流が希薄な学生タイプ (C8)と比較して大学生活における充実感が高いことがわかった。なかでも、クラブ・サークルへの意欲が低いタイプの学生 (特に、C5、C6、C8) は総じて、大学生活における充実感が低いという特徴を指摘することができる。

これらの結果から、大学生活の充実感は、授業に関する学習意欲の関与も認められるものの、特に大学内における人間関係によってもたらされている可能性があることが示唆された。

表6 大学生活の諸活動への意欲と大学生活の充実感の重回帰分析

変数名	標準偏回帰係数(β)
授業・ゼミへの参加意欲	-.07
授業・ゼミの勉強意欲	-.11*
授業・ゼミ以外の勉強意欲	-.03
クラブ・サークルへの意欲	-.09*
家族交流の意欲	.10*
友達・恋人と遊ぶ意欲	-.22**
アルバイトへの意欲	.01
インターネット・SNSへの意欲	-.02
	R^2
	.10**

** $p < .01$, * $p < .05$

表7 各学生タイプにおける大学生活の充実感の平均値*

クラスター	平均値(SD)
C1	2.06 (0.67)
C2	2.06 (0.82)
C3	2.02 (0.69)
C4	1.84 (0.72)
C5	2.29 (0.85)
C6	2.40 (0.89)
C7	2.10 (0.94)
C8	2.26 (0.87)

*低い値の方が充実感が高い

4. まとめと今後の課題

本稿では、主として、植村・向居（2020）が作成した汎用的技能尺度を用いて大学生生活における諸活動への意欲との関連性を分析することで、どのような大学生生活の過ごし方をしている学生の汎用的技能が高いのかについて検討した。これまでも溝上（2010）、および、山田・森（2009）によって、様々な活動に対して高い意欲を持って取り組む学生の汎用的技能は高く、充実した日々を過ごす学生の汎用的技能は高いという傾向が指摘されていた。大学生生活はそれまでの学校生活にくらべてはるかに行動範囲、活動範囲、交友範囲が大きくなり、多岐にわたる活動への参加の機会が増大するため、そこで得た経験が汎用的技能の獲得につながっていると考えられるからである。

そこで、本研究においても大学生の汎用的技能尺度（植村・向居, 2020）の8つの因子、すなわち、「社会的関係形成・参画力」（F1）、「創造的問題解決力」（F2）、「自己主張・リーダーシップ力」（F3）、「批判的思考力」（F4）、「専門知識・知的面での自信」（F5）、「母語運用力」（F6）、「外国語運用力」（F7）、「情報リテラシー」（F8）と、大学生生活の充実度や諸活動への意欲との関連について分析を行った。その結果、大学生生活における諸活動にどの位の時間をかけるかという参加の度合いよりも、諸活動への参加の意欲の方が汎用的技能との関連が深いことがわかった。そこで、大学生生活における諸活動への意欲を中心に分析を行ったところ、授業・ゼミ以外の勉強意欲が「情報リテラシー」（F8）以外のすべての汎用的技能尺度に影響を与えていることがわかった。同じく授業・ゼミの勉強意欲という大学における学びも「社会的関係形成・参画力」（F1）、「自己主張・リーダーシップ力」（F3）、「外国語運用力」（F7）以外のすべての汎用的技能尺度に影響を与えていることがわかった。また、アルバイトへの意欲が「自己主張・リーダーシップ力」（F3）、および、「批判的思考力」（F4）に対して負の影響を及ぼし、家族交流の意欲も「批判的思考力」（F4）、および、「情報リテラシー」（F8）に対して負の影響を与えていた。前者のアルバイトという営みに関しては、向居・佐藤（2012）の考察においても、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」によって構成される社会人基礎力に影響を与えないことが指摘されている。アルバイトへの従事や家族との交流という行為は、汎用的技能のなかでもリーダーシップや批判的思考力という側面においては阻害される要素となることが明らかになったが、今後、学生の生活形態（一人暮らしか実家から通っているか）や経済状況などを考慮に入れながら、その関連性についての因果関係を明らかにしていかなければならないだろう。

つぎに、大学生生活の過ごし方から学生を8つのタイプに分類し、汎用的技能との関連性をみたところ、クラブ・サークル活動への参加意欲が高く、かつ、正課内・外に関わらず学業への高い意欲をもつタイプの学生（C3、C4）において、汎用的技能尺度における自己評定値が高まることがわかった。他方、正課内・外に関わらず学業への意欲があまり高くなかったり、かなり低いタイプの学生（C1、C2、C5）では、「創造的問題解決力」（F2）、「自己主張・リーダーシップ力」（F3）、「批判的思考力」（F4）、「専門的知識・知的面での自信」（F5）、および、「外国語運用力」（F7）などにおいて低くなることがわかった。

最後に、大学生生活の過ごし方から分類した学生タイプと大学生生活の充実感との関連性をみたところ、大学生生活におけるすべての活動への意欲が高いタイプの学生（C4）が、もっとも大学生生活における充実感における自己評定値が高いことがわかった。なかでも、クラブ・サークルへの意欲が低いタイプの学生（特に、C5、C6、C8）は総じて大学生生活の充実感が低いことは注目に値する。

このことから導き出される実践的示唆として、大学では授業・ゼミ以外の学生による自主的なクラブ・サークル活動の実践の場を今後、さらに増やし、その活動を充実化させる必要性がある。

また、今後の課題としては、第一に大学生活における充実感も指標として用いたが、その具体的な中身が不明瞭な点を指摘しておかなければならない。大学生活の充実感については、溝上（2009）を参考に「あなたの学生生活は充実していますか」に対して、“充実している”～“充実していない”の5件法で評定を求めたが、肝心の学生生活における充実感を構成する要素が判明しておらず、今後の大学運営における実践的な示唆を得ることができない。第二に、これまで政府主導で提唱され、すべての学校教育段階において育成が目指されてきた汎用的技能という能力概念が、実際の社会で本当に役立つものであるのかについて検証する必要がある。あるいは、どういう場面において、どういう職種においてどのような汎用的技能が必要になるのかといった検証も行わなければならない。そうした手続きを経なければ教育と社会の有機的な連携はなしえない。第三に、今後、継続して追跡調査を実施し、学生の入学時と卒業時の汎用的技能を測定することにより、大学生活における諸活動がどのように汎用的技能に影響を与えるのかを検証する必要がある。一時点の調査では、汎用的技能尺度における自己評定値が、本人の能力や資質によるものなのか、諸活動により影響を受けたものであるのかを検証することができない。引き続き、追跡調査を行うことにより、大学生活における諸活動と汎用的技能の関連性について因果関係を解明していきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、質問紙調査にご協力頂いた3大学の先生方に厚く御礼申し上げます。

付記

本論文は平成30年度県立広島大学重点研究事業（学際的・先端的研究（A））の助成を受けたものである。また、本研究の一部は植村・向居（2020）として発表された。

引用文献

- 子安増生（2011）. 批判的思考力の知的側面—学士力をどう獲得するか— 楠見孝・子安増生・道田泰司（編）批判的思考力を育む—社会人基礎力の基盤形成—（pp. 25-44）有斐閣
- 日潟淳子・森口竜平・小山田祐太・齋藤誠一・城仁士（2009）. 正課外活動によって得られる能力尺度の開発 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 129-134.
- 見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳（2008）. 大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, 32, 189-196.
- 溝上慎一（2009）. 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 元吉 忠寛（2011）. 批判的思考の社会的側面 楠見孝・子安 増生・道田 泰司（編）『批判的思考を育む—社会人基礎力の基盤形成—』（pp. 45-65）有斐閣
- 向居暁（2013）. 大学生の正課外活動と社会人基礎力—幼児・児童教育関連学部卒業生において—

日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 246.

向居暁・佐藤純 (2012). 高校生活と社会人基礎力の関連性 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 187.

植村広美・向居暁 (2020). 大学生の汎用的技能に関する研究(1)—汎用的技能尺度の作成の試み— 県立広島大学総合教育センター紀要, 5, 17-24.

山田剛史・森朋子 (2010). 学生の視点から据えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割 日本教育工学会論文誌, 34, 13-21.

吉田寿夫 (1998). 本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本 近大路書房